

二十一世紀の大黒柱に

歯学部 岩本 義史



シヨナルへのお膳立てができたというものである。二十一世紀の歯科医業は、諸君一人ひとりが大黒柱となって支え、発展させていくことはまぎれもないことと信じている。そうなった時に、諸君を世に送り出したことを本当に誇りとして実感することになろう。ご活躍とご健勝を祈念している。

卒業おめでとう。六年の学業を終えて、まさに社会の期待に沿って巣立っていく。諸君が教育の成果を自ら発揮するのが、社会の期待に応えることになるであろう。

歯科医学は深化しつつ、かつ、幅が広くなってきている。諸君が自ら学び、また受けた教育の中身は、歯科医学の序の口ではある。また歯科医学のための基本を身につけた(？)程度ではある。しかし、その程度かと思うなかれ。基本がいかほど大切であるか。諸君の社会活動の土台となっていることを今一度振り返り、味わう必要がある。そのことに六年を費やした意味合いをじっくり味わってほしい。さすればおのずと、自分の社会的役割に真剣に意欲、意識をもつことになり、プロフェッ

卒業にあたり

歯学部 青戸 一司

卒業を前にこの六年間を振り返ると、語り尽くせないさまざまな思い出が頭を過る。その思い出の一つひとつに刻まれた人との出会いにより、自分は大きな影響を受け、心身を支えられ、無事卒業できるように思う。思えば共に酒を飲み、バカ騒ぎをした友。悩み落ち込んだ時、話を聞き、励ましてくれた友。改善すべき点を的確に言い当て、アドバイスをしてくれた友。厳しく指導していただいた先輩、先生がた。歯科医に憧れて入学した私



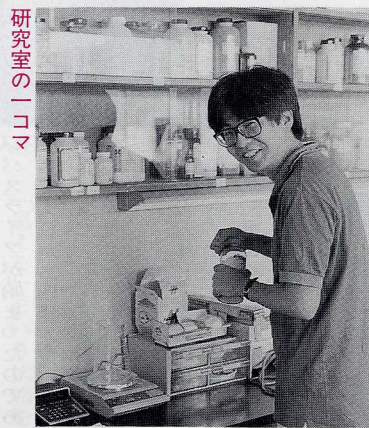
臨床実習にて(本人後列右から3人目)

気ままな

大学院生活を振り返り

歯学研究科博士課程 土肥 直史

私は広島大学歯学部を卒業後、歯科保存学第二講座に大学院生として進学し、口腔解剖学第二講座で「芸能人の



研究室の一角

命」である歯のエンメル質について研究を行った。当時の解剖学教室は、現在の教授が赴任されてきてまだ半年しかたつておらず、大学院生は私一人だった。そのおかげで教授の眼が常に光っていたが、直接指導していただける機会も多く、研究室を広く使え、研究室がますます狭く感じるが、にぎやかな教室になっていた。人前で話をするのが苦手な私が、数回の学会発表をすることができたのも、お世話になった先生がたと事務官のおかげと感謝している。

今振り返ると、卒業後すぐに歯科医療に従事していたならできなかったことを数多く経験し、いろいろな人に出会い、また自分を見つめる機会を持つことができた、楽しく有意義な四年間だった。

もしもこんな学生がいたら贈る言葉は無い

工学部長 松村 昌信

X君、君の修了に際して送るべき言葉は何も無い。学業の成績は十分優秀だったから、反省を促す言葉は要らない。社会へ出ればたちまち周囲から信頼されて、仕事もどんどん進むだろう。どんな困難に出会っても、きっと自分で解決してしまうに違いない。だから君に社会へ出るときは心構えを説く必要はない。仕事では大活躍しながら、同時に自分の趣味を楽しみ、人生の目標を高いところに定めていることだろう。そんな君に贈るべき人生訓はない。

君の将来になぜこんなに確信がもてるのか。この三年間の君の行動を見ていれば誰にでも分かる。部活はハンドボールのキーパーだった。あれほど自己犠牲的なポジションはあるまい。広島アジア大会のボランテイアをやったとき、言葉は分らなくてもカザフスタンの女子ハンドボールチームの選手たちが君を離さなかったのは当然だ。アルバイトは週末深夜のビル内装作業。社長が広島地区は君に全部任せるとから広島に残ってくれないかと頼んだのも当然だ。一年半続けた白血病の先輩への献血。君は彼のお母さんの心の支えだった。

卒業おめでとう。六年の学業を終えて、まさに社会の期待に沿って巣立っていく。諸君が教育の成果を自ら発揮するのが、社会の期待に応えることになるであろう。

卒業おめでとう。六年の学業を終えて、まさに社会の期待に沿って巣立っていく。諸君が教育の成果を自ら発揮するのが、社会の期待に応えることになるであろう。



ことができるのは君自身だけである。この言葉も君には必要ではない。君はその通りをやつて来たのだから。

東広島キャンパス

工学部 橋本 豪

砂塵の舞う東広島キャンパス。平成五年四月、僕は入学しました。今でこそ懐かしい思い出であるが、当時、キャンパスの工事は完了しないまま、雨の日は砂塵の舞うなか日向ぼっこ、雨の日は泥沼の中で雨宿り、電車に乗れば、靴の汚れを見れば広島大学とわかるとまで言われたあの頃。アルバイト事情も整っていなかったため、結局四年間広島市内からの通学となりました。今となっては、この移転は早すぎたのではないかと感じています。

確かに、勉学に励むのであれば良い環境であるといえるが、いざ社会へと巣立っていく人間として考えれば、社会との接点を求めるには難しいと感じました。大学生とは学生であり、社会人でもあるべきであると考え、思うところのある日々でありました。



研究室の仲間と海水浴場で(本人左から4人目)

学会で訪れた北海道

工学研究科博士課程前期

友永 芳男

大学院での二年間はあっという間に過ぎた。何について書くかかと思いついていないと、学会に出席するために訪れた北海道のことが頭に浮かんだので、そのことについて書いてみたい。



網走刑務所にて(本人左から二人目)

北海道は初めてだった。夏だったが適度に涼しく快適だった。発表時間は短いものであったが、準備には時間を要した。余裕の笑顔で発表する予定であったが、本番になってみると笑いだしたのはヒザであった。練習のおかげか途中から調子を取り戻し何とか切り抜けた。ただ、質問に上手く答えられず、反省すべき点も多くあった。

学会の後、友人と北海道観光に出かけた。そこではいろんなことがあったがスペースの都合上省略する。一番印象に残ったものだけを書いておこう。それはクツチャロ湖畔でみた星空であった。空気が澄んでいるので星がたくさん見える。天の川も見え、流れ星も飽きるほど見ることができた。道路の上に向けて寝ころんで長いこと星を見ていた。眼下に広がる宇宙を眺めていると、思考の次元が変わってくるのが分かる。

社会人が書く所感

工学研究科博士課程後期

山本 利弘

社会人として入学したのが三年前。業務との両立で月に平均一、二回の通学である。一般の学生に比べると思いつきはないが、いくらか緩々である。

広島市内から車での通学。まず駐車場の空気を探すことから始まる。キャンパスは広大で素晴らしいが、先生方の部屋は意外に狭かった。昼休みには食堂で若い学生と席を隣にする。いつのまにか自分の年齢を忘れていた。ふと我に返るが、こんな感覚が新鮮で嬉しい。売店のすぐ横は、煙草をふかしながらとりとめもないことを考えるいい場所になった。

思えば学部を卒業したのが約二十年前である。今度はもうすぐ大学院を修了する。学位を取得できれば大きな目標の達成になる。ここまで来ることができたのは、研究が好きで好きな性分のおかげかもしれない。でも甘んじている、単なる自己満足で終わってしまう。これを出発点にしたい。また大学と企業との交流にも注力したい。最後にあったが、お世話になった先生がたに深くお礼を申し上げます。